

連載

柔道・友情・平和

第2回

山下 泰裕

人間らしく、柔道家らしく
生きる姿勢について

.....

追悼・・親友、ラドミル・コバチエビッチ
(旧ユーゴスラビア→米国)

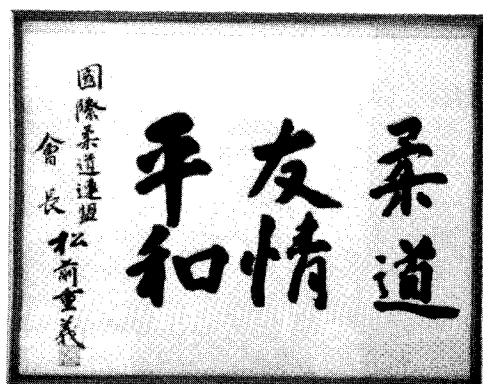
世間から柔道日本一ともてはやされると、知らず知らずのうちに自分自身を見失ってしまう。私が世間の高い評価と実際の自分(学生)との落差を感じて悩んでいたときに、「先輩は、山下泰裕らしく生きればよい」とアドバイスしてくれた後輩の留学生がいた。この言葉で、肩の荷が下りた。彼の名は、ラドミル・コバチエビッチ、柔道部では1年後輩だが3歳年上の人生の先輩だった。その彼が、この世を去った。最近、気持ちの落ち着きを取り戻したので、無二の親友を偲び、思い出を記してみたい。

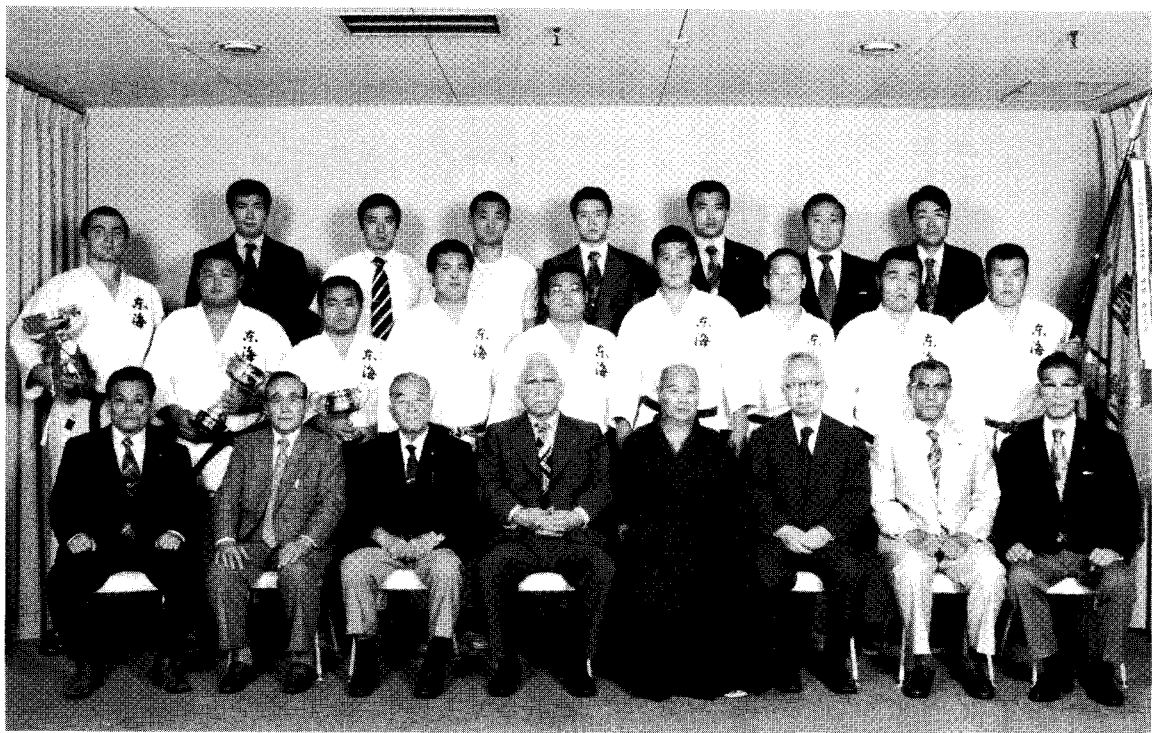
ビッチ、別れは早すぎるよ

2006年6月17日の昼前、飛行機はモンテネグロのペオグラードに到着した。関西国際空港から中東のドバイ経由で、取るものも取り敢えず駆けつけた。機内は、折からドイツで開催中のサッカーW杯応援の乗客で満席、にぎやかだった。私はといえば、対照的に大事な友を失った悲しみに打ち沈んでいた。いつものように眠ることもできず、本や雑誌に目を通す気にもなれなかった。

「ビッチ、別れは早すぎるよ...」

ラドミル・コバチエビッチ：私たちは、親しみをこめてビッチと呼んだ。東海大学柔道部では1年





第26回全日本学生柔道優勝大会で初優勝した東海大学柔道部（昭和52年6月12日）

中列一番左・ラドミル・コバチェビッチ氏、中列左から2人目・筆者

下の後輩だが、1954年3月生まれなので57年6月生まれの私より年齢は上で、人生の先輩であった。

18歳のときに来日して柔道の練習に励み、帰国後、ヨーロッパ選手権大会やオリンピック競技で活躍した。21歳で東海大学体育学部に入学的のために再来日し、在学中は柔道部の全日本学生柔道団体優勝（4連覇・1977〜80）に貢献するとともに、79年のパリ世界柔道選手権大会無差別級及び80年のモスクワ五輪95kg超級とともに銅メダルを獲得した。その後、母国を離れ米国・ニューヨークで教育に力を注ぎ、熱血教師として多くの若者、保護者らに慕われていた。昨年の春にニューヨークからドイツの病院に移り、亡くなる数日前に本人の希望を入れて故郷のベオグラードに帰り、6月14日に息を引き取った。肺がんだった。

「ビッチ、本当に早すぎるよ……」

私の心を映すかのように、ベオグラードの空もどんよりと曇っていた。到着した足で午後の葬儀に

出席したが、残された妻のサブカ夫人と子どもたち二人の悲しみの姿を見て言葉に詰まり、ビッチがいなくなったことを改めて強く実感させられた。

先輩は、人が好いから心配だ！

4年前、私は、国際柔道連盟（IJF）の教育コーチング理事（就任にあたり、4週間、ニューヨーク在住のビッチを訪ね、英会話の実力アップを図った。久しぶりは私の先生役を買って出たほかに米国のスポーツ関係者をはじめいろいろな人々に会わせてくれた。ビッチ作成の勉強スケジュールは大変厳しく、朝の7時半から午後1時まで英語の個人レッスン、午後はさまざまな社会体験が組まれていた。

まず英語のレッスンは、ビッチと高校の英語教師が先生で、容赦なく言葉の矢が飛んでくる。1時間聞くらいで私の思考力はストップ、コーヒープレイクをお願いす



コバチェビッチ氏の葬儀での筆者

る日々だった。午後の社会体験は、概ね次のようなもの。

- ・オリンピック競技を放送するNBCの担当者など幅広くさまざまな人物と会って話し合う。
- ・一流の劇を鑑賞する。
- ・ニューヨークの負の側面、裏の部分も見ると。

このような配慮は、まさしくビッチの私に対する友情であり、親切であった。

ビッチ曰く、

「山下先輩！ 世界の柔道界、つまり国際柔道政治の中には、いろ

いろな方法（武器）で他人の物を奪おうとする人間がたくさんいる。表と裏、醜さがある。その中に、先輩は丸腰、笑顔で入っている。日本人の柔道に対する純粋な気持ちだけではやっていけない。身ぐるみはがれるような気がしてとても心配だ。だから、この1ヵ月で表も裏も見聞し、備えてほしい」

人一倍正義感が強く、柔道に純粋な気持ちを持つているビッチ。道理に合わないことは許せない性格で、行動で抗議するタイプ。日

本人の私たちは、自分たちが失いつつある一面を彼に見て、『サムライ・ビッチ』と称えた。それ故に旧ユーゴスラビアを代表する世界的な柔道選手でありながら、母国を離れざるをえなかったともいえる。その実体験から発する厳しい言葉に、私は彼の優しさを感じた。

ビッチは、東ヨーロッパの、歴史的にも激動の地域に生まれ育ち、理想と信念を持って生きてきた。その人生経験から得た貴重な教訓、すなわち激動の世界を生きるパワーを私に授けようとしていたのではないだろうか。私は、ハードスケジュールを何とかこなし、一日が終わると倒れるように眠る日々だったが、ビッチの思いが分かるだけに、弱る心に鞭打って勉強した。

柔道チャンピオン？糞を食らえ！

思い出はいろいろとあつて語りつくせないが、私の生き方に大きな影響を及ぼしたことを一つ紹介

したい。

あれは、大学4年生のときだった。全日本柔道選手権大会で3連覇し、柔道日本一として注目されていた私は、行く先々でもてなしを受けた。しかし、社会では柔道日本一でも一人の若い学生に変わりはない。精神的にもまだまだ未熟だし、人との付き合い方もよく分からず、戸惑うことばかりで随分と悩んでいた。そのような私を見兼ねてビッチがこう言った。

「先輩は、柔道のチャンピオンである前に山下だ。山下泰裕として、先輩らしくすればよい。チャンピオン？糞を食らえ！」

私は、聞き返した。

「ではビッチ、君はどのように生きたいのか？」

すると、ビッチは胸を張って声を上げた。

「簡単だよ。俺は、人間らしく、ユーゴスラビア人らしく、男らしく、柔道家らしく生きたい」

私は、彼の、この言葉にはたとえ気づいた。

「そうか、悩むことはない。俺は



コバチェビッチ夫妻サヨナラパーティーで（昭和56年5月22日撮影）

俺らしく生きればいいのだ。」
一つの開き直りといってよいだろう。これで気分すっきり、精神的に楽になった。

その後、私は連勝記録を伸ばし、全日本柔道選手権大会、世界柔道選手権大会、オリンピック競技など数多くの大会で優勝し、国民栄誉賞ほかいろいろな賞も受賞し

た。また、現在では大学教授の職に就いているけれども、栄誉や肩書を気にすることはない。私の行動基準は、ビッチの言葉を借りて言うならば、「人間として、日本人として、男として、柔道家としてやるべきことかどうか」というもので、名声や栄誉、肩書などは虚栄に過ぎないと思っている。虚

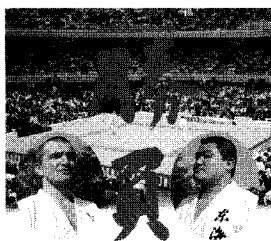
栄の夢に心を奪われるとき、人は人間としての大切なものを失っていくのではないだろうか。
27年前のビッチのアドバイスは、私の処世訓になっている。

六十秒いっぱいに進進するならば…

ビッチは、日本語の著書を残している。1983年にベースボール・マガジン社から発行された

『勝負：わが柔道の技と心』Ⅱ写真Ⅱである。その中で、ラドヤード・キップリング（1865～1936）という詩人の詩を紹介し、「ぼくとおなじように好きになつてほしい」と薦めている。その詩の、締めくくの一節を記す。

もし君が、民衆と話しても威厳



わが柔道の技と心

を保ち、

王と歩いても民衆の心を失わなければ、

もし敵も愛する友も君の心を傷つせず、

もしみな君を頼つても頼りすぎなければ、もし君が、一期一会のただ一分間を、

六十秒いっぱいに進進するならば、

この世は君のものであり、すべては君のものだ、

そして、そのうえ、君は本当の人間になる！

ビッチは、この詩の言葉のように生きようと努め、実際に生き抜いたといえる。

「自分の灰は、家族のいるニューヨークに、故郷のベオグラードに、そして愛してやまない東海大学に」：彼の遺言である。

ビッチの言葉は、今の私を支えている。

〈ありがとう、サムライ・ビッチ〉
毅然たる表情の遺影に感謝しつつ献花した。